# 伊豆大島・安永の大噴火

安永6年7月29日(1777年8月31日)、伊豆大島の山頂火口から噴火が始まった。激しい爆発音とともに強い地震が島を揺らせ、大量のスコリア(火山岩滓)が全島に降り注いだ。長さ3cmから5cmほどの火山毛が島中に降ったという。夜になると、山の上一面に火光を発し、江戸品川沖からもその火映を望むことができた。

この安永の大噴火については、当時伊豆韮山の代官であった江川太郎左衛門が、噴火の経過と島民生活への影響を逐一江戸幕府へ報告している。

それによれば、島民は恐怖のため仕事も手につかず、芋畑も焼け砂に覆われ、収穫は皆無に近かった。噴出物は海中にも降り注いだため、魚も島に寄りつかなくなり、出漁もまったくできない有り様であったという。

噴火は翌安永7年(1778年)の1月まで断続的に続き、1月下旬にはいったん鎮静化したが、3月22日にはまた新たな噴火が始まり、北西斜面へ溶岩を流出、その長さ約4kmに達した。その後は噴火の勢いも弱まったので、島民は8月ごろまで山稼ぎに従事することができた。

だがそれもつかの間、8月下旬から噴火は前にもまして盛んになり、9月18日には溶岩を南西斜面に流出、野増村と差木地村の間にある赤沢に押し出すこと約3km、辛うじて道路の上で焼け止まった。

さらに9月27日には、大量の溶岩がカルデラ床を埋めて北東へ流下した。「――海中へ焼石押し出し、波打際より沖へ壱町ばかり水上炎夥しく燃え、高さ弐間程、横幅壱里程、大石にて築き上げ申し候――」と、太郎左衛門が幕府へ報告しているとおり、この溶岩流は海中に入って100mほど海に突き出したのである。

11月17日に噴火は再び勢いを増したが、年が明けると、活動は次第に弱まり終息に向かった。

この大噴火を通じて全島に降り積もったスコリア・火山灰の厚さは、平均50cmにも及んだ。また、流出した溶岩の総量は、1986年の噴火や1950～51年の噴火時の約10倍にも達するものであった。

◇

安永の大噴火を示すこの古絵図は、現在大島町役場に保管されているもので、大島を西の方から鳥瞰図風に描いてある。地図としては正確さを欠くが、三原山の山頂噴火や、カルデラ床から溶岩の流れ出た様子がよく描かれている。

溶岩流のうち、向かって左手に細く流れ出ているのは安永7年3月22日の溶岩、右手つまり南西方向に伸びているのが9月18日に赤沢へ流下した溶岩、向こう側へ幅広く海にまで達しているのが9月27日に流出した大規模な溶岩流である。

◇

大島では、海岸の崖や道路の切り通しなどに、大島火山の過去の噴出物が層をなして露出している。どれも、安永規模の大噴火のたびに当時の地表に降り積もったスコリアや火山灰の層である。

昨年急逝された中村一明氏と筆者とが、大島火山の調査を始めたのは、今から30年も前のことであった。噴出物の層を一枚一枚丹念に調べ、一方では古絵図や古文書に残された記録をはじめ、出土した土器の推定年代などを照合しながら、大島火山の生い立ちや活動史を組み立てていった。

中村氏が最終的にまとめた結果によれば、大島火山は、最近1500年前後の間に、安永規模の大噴火を12回起こしていることがわかった。14世紀以降だけをみても、1338年、1421年、1552年、1684年、そして安永の1777～78年と、ほぼ100年に1回の割合で大噴火が発生してきた。ところが、安永以来200年以上も大噴火は発生していない。

1986年11月21日、上に挙げた1421年以来という山腹割れ目噴火が発生したとき、専門家の脳裏をかすめたのは、この統計的事実だったのである。

(NHK解説委員　伊藤和明)

大島町役場蔵